

be ambitious!

構造家・荒木美香

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■合理主義

生まれは1984年神奈川県で、育ちは長崎県だ。「エセ浜っ子」と扱われると微笑む。

2021年4月開設の関西学院大学建築学部准教授の肩書きをもち、荒木美香構造設計事務所を設立している。研究室の棚は空っぽで床には段ボールの箱…。「部屋を移る予定なので」と、1年経っても気にしていない様子は、合理主義者の片鱗が見える。赴任と同時に家族と神戸に移るが、住宅建築家の夫は自宅を事務所にして「育メン男子」。働く女性にとって理想的なのは、家事を分け合う編集長の家庭にも通じるのです。

高校生のころ、好きな英語で人の役に立てるのは外交官かと模索したが、より得意な分野を活かせるのは何かと探るうちに図書館で読んだ本から建築に行きつく。実は建築に興味をもったのは阪神・淡路大震災が起きたときのこと。元来正義感の強い子供だったが、小学5年生で「地震が来ると建物が壊れるのだ」と、強く実感した。

東京大学理科一類を経て建築学科に進学。建築を楽しみと思えないこともあったが、卒業設計で「合板を使って組み上げる工法」を発案したことで変わる。安田講堂での学外審査公表会で、ゲストの構造家の佐々木睦朗さんと建築家の山本理顕さんに注目されたのだ。「奥行き200mmのOSBをカゴのように組んだ面材」でつくる空間。建築にはこんな評価軸もあるんだ!とやっと建築に楽しみを見出したのだという。サラサラとスケッチをして説明してくれる同じパーツで展開できる構法は、有事のときにシェルターになればとの想いもあったのでした。

■構造家 JUN SATO

構造家の佐藤淳さんは、授業の講評会で出会い「できないといわない構造家」として心に残っていた。修士1年のときにミュンヘン工科大学に短期留学、帰国



後アルバイトで行った佐藤淳構造設計事務所は創世記で所員も数名。佐藤さんは留学中に研究した籠のシェルを見て、「丁度こういうのがやりたかった!」として採用した。それが修士論文の基礎にもなっている。卒業して所員に。11年在籍したから手掛けた建築や交流した建築家も隈研吾さんはじめ多数いる。退所間際に担当した大阪中之島美術館（設計：遠藤克彦建築研究所）は印象に残っているという。

佐藤さんから何を学んだか? 「わからないといわずに、その場でできることからやる精神」、木村俊彦先生の教えて、その場で描いて分析する佐藤さんのスタイルを荒木さんも踏襲しているのです。

■アカデミック

建築学部ができて間もない関西学院大学は教えるのも大変だろうという仲間もいて、覚悟して赴任したが、学生たちは真面目な勉強家が多い。今はまだ材料実験用の設備しかないが、これから少しずつ整備していく。「自分のネットワークを広げることができる限りの力で教鞭を取りたい」と語る。

実務は建設地が県外の場合もあり、出張も多い。大型建築も設計したいし、博士論文にも着手したいという思いもある。家族のバックアップに感謝しつつ研究と実践の狭間で、荒木さんは少し悩みながら、夢は膨らむ。

荒木さんの修行時代を佐藤淳さんに聞くと…「揺れるのもつくったなあ。歴代1番失敗したけど1番力量がある。たまには事務所に顔を出してよ」と。構造家・荒木美香さんはアカデミックな構造界分野を制覇するはずの逸材なのです。